

# 熱帯 バイオマス社会

プロジェクトメンバー-寄稿エッセイ 奥野 克巳 .....	1
活動記録 1-2 月 .....	3
Riwanto Tirtosudarmo 氏 講演会報告 .....	6
Bintulu オフィス開設のお知らせ .....	8
プロジェクト参加メンバー .....	10

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (S)

## 東南アジア熱帯域における プランテーション型バイオマス社会の 総合的研究



## 油ヤシ・プランテーションにやって来るイノシシ

—ブラガ川上流のプナンの新たな夜の待ち伏せ猟— プロジェクトメンバー寄稿エッセイ  
奥野 克巳（桜美林大学リベラルアーツ学群）

ブラガ川上流域には、クニャー人とともに、500人ほどのプナン人（西プナン）が住んでいる。プナンは、サラワク州政府による先住民の定住化政策に応じて、1960年代後半にその地に移り住み、州政府やクニャー人の助けを借りて焼畑稲作を開始した。ところが、今日に至るまで、プナンの稲作の知識と技能は、相対的に低いままにとどまっている。そのため、米の収穫がある年もあれば、管理不足で獣害などをこらむって、収穫がない年もある。ブラガ川上流域のプナンには、2006年と2007年にはほとんど収穫がなかったが、2008年と2009年には、十分とはいえないが収穫があった。それゆえに、彼らの生存経済は、今日でも、狩猟に大きく依存している。彼らは、狩猟によって得た獣肉を自家消費するとともに、猪肉を木材伐採キャンプや近隣のクニャー人たちに販売することで現金を手に入れている。

ブラガ川上流域のプナンは、イノシシ、サル、シカ、鳥、魚など、全ての動物を食べる。食のタブーは、個人的なものを除いてない。プナンが最も好むのは、イノシシの肉である。

プナンは、イノシシ猟に関しては、今日、二つのタイプの狩猟を行っている。一つは、朝から日が暮れる前までに、森のなかで行われる旧来型の狩猟である。もう一つは、夜に、油ヤシ・プランテーションで行われる狩猟である。プナンは、古くから、熱帯雨林のなかで、吹き矢や猟犬を用いて、動物の狩猟を行ってきた。加えて、野鶏などを獲るために、罠猟も行ってきた。1960年代になって、ライフル銃が導入されると、ブラガ川上流域のプナンは、ライフル銃を自分たちで作るようになり、銃弾を手に入れて、狩猟をするようになった。今日では、ライフル銃による狩猟が、彼らの狩猟の主流になっている。

他方で、1980年代になると、ブラガ川上流域の周囲の樹木は、サラワク州政府よりコンセッションを与えられた木材伐採会社によって伐採されるようになった。木々は切り倒され、土地は裸にされた。その後、1997年になると、この地域一帯に、油ヤシの植林計画が導入されている。



マレーシア大学サラワク校東アジア研究所のジャイル・ラングップ氏によると、「油ヤシ計画のもとで、油ヤシのために台地にされた場所とともに、全ての植物が取り除かれることになった」、「その地域は、もともと、プナンが野生動物を狩猟し、サゴや籐を収集するために使っていたが、このようにして、プナンの食糧と現金収入源が減ることになった」という。森林伐採によって森は裸になり、裸になった台地に油ヤシの木が植えられることにより、動物が寄りつかなくなり、1980年代末から1990年代にかけて、ブラガ川上流域のプナンは、周辺地で狩猟をすることができなくなった。今日、プナンは、狩猟するためには遠くの森に出かけなければならなかったと、その当時のことを回想する。

ところが、そうした「狩猟の暗黒時代」を経て、2000年代の初めになると、狩猟をめぐる、新たな展開が見られるようになった。油ヤシの木が大きな実をつけるようになると、イノシシや他の小動物（ヤマアラシなど）が、油ヤシの実を食べに来るようになった。そうした動物は、夕方から朝方にかけて、油ヤシの実を食べにやってくるということに、プナン人たちは気づいたのである。そのようにして、夜中に、油ヤシのプランテーションで、イノシシがやって来るのを待ち伏せるタイプの狩猟が行われるようになった。油ヤシ・プランテーションにおける狩猟とは、油ヤシの実を食べにやって来るイノシシを待ち伏せて、銃撃するというものである。



イノシシの足跡を確認する

日暮れ前に、プナンのハンターは、単独または複数で、通常は、木材会社の車の荷台に載せてもらって、油ヤシのプランテーションに入る。すぐさま、彼らは、イノシシの

足跡を確認する作業を開始する。それらの足跡が古いものか、真新しいものかを見きわめて、昨夜か、その日の朝についたと思われる真新しい足跡がある場所を探し出して、油ヤシの実を食べにやってくると思われ、予想される通り道に、待ち伏せるための場所を設ける。時には、樹上で、場合によっては、地面の上で、イノシシがやってくるのを待つのである。

ハンターは、暗闇のなかで、まんじりともせず、藪のなかから現われるイノシシをひたすら待つ。イノシシが近く物音、イノシシの鳴き声を聞き漏らさないようにしながら、他方で、イノシシが逃げてしまわないように、できるだけ物音を立てないようにし、さらには、人の匂いが漂わないように注意を払う。プナンは、イノシシが、聴覚と嗅覚に敏感であることをよく知っている。



煙草を吸いながら待ち伏せするハンター

わたしの記録によれば、2006年10月1日から11月24日にかけて、ブラガ川上流域の3キロ四方の油ヤシ・プランテーションでは、計11回の猟が行われ、9頭のイノシシがしとめられた。猪肉は、頭と内臓肉を除いて、キロあたり4~10リンギット（1リンギット=約30円）で、木材伐採キャンプに持ち込まれて売られるか、クニャー人の雑貨店に売られて、現金に換えられた。現金は、つねに、狩猟に参加したメンバーで、均等に分けられる。わたしが知る限り、ブラガ川上流域のプナンが、森のなかで獲れたイノシシと油ヤシ・プランテーションで獲れたイノシシの肉の味を比べることはない。彼らは、昼間、森のなかにいるイノシシが、夜になると餌を求めて、油ヤシ・プランテーションにやってくるのだと考えている。森で獲れても、油ヤシ・プランテーションで獲れても、それは同じイノシシで、味に違いはないとプナンは考えている。

プナン人は、イノシシが、油ヤシ・プランテーションにどういった周期でやってくるのかについてほとんど知らない。彼らは、プランテーションのインドネシア人労働者たちに、

イノシシの足跡があるかどうかについて情報を仕入れたり、油ヤシのプランテーション内でイノシシが獲れたという、別のハンターからの情報を耳にしたりして、油ヤシ・プランテーションに入って、猟をするようになる。プランテーション会社の作業員が除草剤を撒くと、しばらくの間、イノシシは油ヤシの木に近づかない。

2008年の8月に、シンガー川流域のプナンの居住地を訪ねたことがある。そこでは、現在、急ピッチで木材伐採が行われ、あたりは禿山になっている一方で、少しずつ油ヤシが植樹されているところだった。ブラガ川流域に比べると、油ヤシの木はどれも低木だった。シンガー川流域のプナン人たちは、油ヤシ・プランテーションでの狩猟を行っていなかった。彼らは、周辺地の樹木が切り倒されて、周辺にイノシシがいなくなって、遠くにまで猟に行かなければならないことを嘆いていた。それは、1990年代のブラガ川流域のプナン人たちの経験と同じものではないかと思われる。

油ヤシ・プランテーションでの狩猟が行われるのは、油ヤシの実が、十分に熟して、イノシシの食に適しているかどうかによる。また、イノシシは、油ヤシの木を登って実をむしりとりたり、落ちた実を拾って食べたりするのだと考えられるが、油ヤシの木が大きく成長して、油ヤシの実が高い場所につくようになった場合、イノシシは、はたしてそれを取ることができるのか、イノシシはやってくるのか、また、そうなった場合、イノシシがどのような行動をとるのか、ブラガ川上流域の事例だけからは、はっきりということはできない。

油ヤシ・プランテーションにおける狩猟は、プナンやその他の先住民にとって、現在のところ、狩猟の新たな展開であるということが出来るかもしれない。しかし、それが、プランテーション企業によって、自然を改変して作られたものである以上、猟場として、今後、どのようになるのかについては、はっきりしたことはいえない。

## 活動記録 2011年1月－2月

### 勉強会：

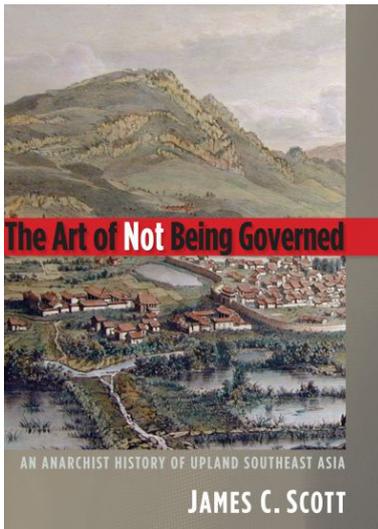
「Scott, J. C. 2009. *The Art of not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* New Haven: Yale University Press.を読む」

2011年1月12日

場所：京都大学東南アジア研究所

参加者：石川 Badenoch 鮫島 内藤 長谷川 祖田

1月18～19日の国際セミナーに向けて、James Scott氏の著作を読み、批評する会合をもちました。この著作は、東南アジア大陸山間部をZomiaという概念で捉え、そこを、人々が政府や戦争、税金、疫病、災害などから逃れ



る場所と規定し、山地－平地関係への新しい視点を提供したものです。東南アジア島嶼部の流域社会を対象としている本プロジェクトとしては、大陸部と島嶼部との政治的・社会的・生態的状況の異同や、ボルネオの河川流域社会へのZomia概念の適用可能性などについて、議論を深めました。

### Project Launch Workshop

2011年1月14日

場所：京都大学東南アジア研究所

参加者：石川 Scott 杉原 鮫島 Badenoch 内藤  
市川(昌) 加藤 藤田 長谷川 生方 祖田

世界的に著名な研究者であるJames Scott氏（Yale University）を、本プロジェクトのアドバイザーとして招き、プロジェクトの趣旨説明を行ったうえで、東南アジアの熱帯域バイオマス社会に関わるレクチャーおよびコメントをいただきました。

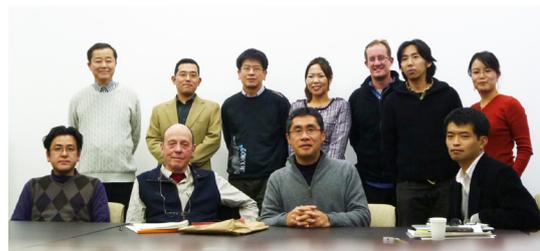
Scott氏は、東南アジア各地の社会に広く通じていると同時に、近年は河川流域研究にも着手しており、その意味でも、本プロジェクトの主旨と関心を共有することができました。

今回のワークショップでは、文理融合の調査研究のあり方についても議論を交わし、今後の研究を進める上で非常に有益なアドバイスを受けることができました。

（報告：祖田亮次）



ワークショップにてプロジェクトメンバーと意見を交換するScott氏



上記3点撮影：祖田亮次

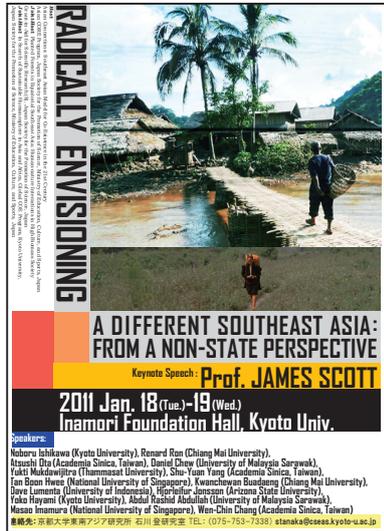
**International Seminar:  
“Radically Envisioning a Different Southeast Asia: From a Non-State Perspective”**

(アジア研究拠点事業との共催)

2011年1月18-19日

場所：京都大学東南アジア研究所

On the January 18-19 2010, our Kiban (S) Project co-sponsored an international seminar entitled “Radically Envisioning a Different Southeast Asia: From a Non-State Perspective”. We welcomed Professor James Scott from Yale University and other renowned Southeast Asianists to the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University to participate in two-day seminar.



撮影：祖田亮次

The central question of this seminar was to ask to what extent can Southeast Asia be re-conceptualized, researched, and rewritten, if we considered non-state-centered perspectives and as such all participants joined in a discussion on these perspectives in the region and engaged in James Scott’s most recent work *The Art of Not Being Governed* (2010). A cursory glance at ethnographies concerning social formations in the region highlights how the nation-state-centered perspective has long generated a discussion on center-periphery dichotomies.

To engage in how the theoretical idea of Zomia (non-state periphery) plays out in Southeast Asia, the seminar explored different empirical case studies, with the aim of further refining and improving our understanding of Southeast Asian societies. The principle undertaking was to set out to correct the distortion imposed upon the past and present by re-reading the history of people without a history by critically examining state-centered historiography and ethnographic works on non-state space such as borderland and maritime frontier. It is in this context that James Scott, the keynote speaker presents his thoughts on how this re-reading can critically allow us to explore new avenues in relations between various actors and tease out the nuances that exist in state and non-state spaces.

The discussion of the seminar was closely related to Kiban (S) project on riverine society where rivers function as liaison between state space (downriver) and non-state space (upriver). The members of our Kiban (S) project also participated in the seminar and joined in the deliberative discussion.

(報告：石川 登)



Scott氏による基調講演の様様

撮影：祖田亮次



2日間のセミナーでは様々な研究内容が報告され、多くの参加者で賑わった  
撮影：中根 英紀

## UNIMAS-Kyoto Seminar

2011年1月24日

場所：京都大学東南アジア研究所

参加者：石川 Jayl Chew 内堀 鮫島 Badenoch  
藤田 奥野 加藤 Dave 長谷川 河野  
神前 祖田

本プロジェクトの現地協力者でもある、マレーシア・サラワク大学 (UNIMAS) の Daniel Chew氏と Jayl Langub氏をお招きして、最新の研究成果について発表していただきました。Daniel Chew氏には、植民地期におけるサラワク華人のアイデンティティの問題について、Jayl Langub氏には、やはり植民地期における状況を中心に、遊動プランとロングハウス居住の焼畑民との間の交易システムについて、それぞれ語っていただきました。

お二人の発表要旨を以下に掲載します。

### Chinese in Sarawak, 1946-1963: Education, Land and Belonging

by Daniel Chew

(The topic) is on Chinese identity formation in Sarawak during the period of British colonial rule from 1946 to 1963, on how the ethnic Chinese perceived their identity in response to political circumstances and socio-cultural factors. Extraneous factors such as the historical and cultural identity of the Chinese, how China viewed its role in relation to the Chinese overseas, the attitudes and policies of the British colonial government, and the reactions of the indigenous people of Sarawak towards the Chinese, shaped the self-perceptions of the Chinese and their sense of belonging to Sarawak. In particular, Chinese education and the demand for land for planting will be examined for their influence on Chinese identity.



Sarawakの華人社会について話す Daniel Chew氏  
撮影：祖田亮次

### Tamu: Trading at the Edge

by Jayl Langub

At the turn of the 20th century, the Brooke government in Sarawak instituted a system of government-supervised trade meetings known as *tamu* between the nomadic Penan and longhouse-dwelling swidden agriculturalists. This system of trade involved three parties: the Penan, their longhouse neighbours and the government acting as a mediator to ensure fair dealings.

It is a unique system in that it combined governance and fair economic exchange between stronger and weaker groups. The institution is significant in that it revealed much about the Brookes' philosophy and governance towards small and isolated groups such as the Penan. The system is no longer practiced but is still remembered with nostalgia by the Penan, primarily for being respectful and fair to all parties.



時折身振りを交えながらメンバーに語りかける Jayl Langub氏  
撮影：祖田亮次

お二人の発表は共に大変興味深く、参加者の間で活発な質疑応答が行われました。Chew氏の華人アイデンティティや先住民との関係性などについては、本プロジェクトの調査地である Kemena / Jelalong 川流域の華人-先住民関係を考える上でも参考になりました。一方、Jayl氏の発表は、狩猟採集民プランの側から見た民族間関係論で、やはり Jelalong 川の話に通じるものがありました。さらに、お二人とは懇親会の時間などを利用してプロジェクト全体に関わる議論も行い、Chew氏とはツバメの巣の流通をめぐる調査、Jayl氏とは狩猟採集民の民族知識に関する調査などで、相互協力関係を築くことができそうです。

(報告：祖田亮次)

## プロジェクト全体会合

2011年2月7日

場所：京都大学東南アジア研究所

参加者：石川 杉原 水野 徳地 内堀 鮫島 藤田  
福島 津上 奥野 市川(昌) 小泉 生方  
市川(哲) 田中(耕) 小林 Hon 加藤 大竹  
木谷 田中(園) 長岡 柳澤 祖田 中根

調査許可が取得でき、いよいよ本格的な調査が始まるという段階で、全体集会を開くことができました。この集会では、石川代表から本調査に向けての準備が整ったことのエピソードについて説明がなされたのち、祖田から具体的に動きつつある「サブ・プロジェクト」についての紹介がありました。それを踏まえたうえで、各サブ・プロジェクトや個人ベースの調査研究の実行可能性について、個別に議論を深めていきました。

例えば、イノシシやアナツバメ、河川災害、森林産物のライフサイクルなど、具体的なトピックをめぐって、異分野の研究者がどのような協働を実施できるのかは、今後も継続的に考えていくべき問題ですが、今回の議論で、その土台を作ることができたと思います。また、ミクロ（たとえば人類学的なフィールド調査）とマクロ（資源経済学やグローバル・ヒストリーなど）との接合可能性、時間的・空間的スケールアップの問題などについても、実際の調査地の状況を想起しながら、これまでよりも具体的な意見交換を行うことができました。さらには、個別の研究（成果）を、プロジェクト全体としてどのように収斂させていくのかという点についても、議論を交わしました。

その他、クエスチョニアを用いた広域的社会経済調査の進め方や、歴史資料アーカイブや映像アーカイブの作製と活用方法、サラワク林業関係者のメモワール集の出版可能性、ニューズレターやホームページを通じての情報発信の必要性、共同調査で得られた情報の取り扱い方、ピントゥル・オフィスの活用ルール、次年度以降の研究会・国際シンポジウムの開催予定など、プロジェクト全体の運営や成果発表の方法についても、幅広く議論し、メンバー間で認識を共有しました。

（報告：祖田亮次）

## Indonesian migrant workers: with particular reference in the oil palm plantation industries in Sabah, Malaysia (Riwanto Tirtosudarmo氏講演会報告 2010年12月11日)

12月11日（土）に京大稲盛財団記念館で開催された、第15回アブラヤシ研究会において、本科研で招へいしたインドネシア科学院（LIPI）のRiwanto Tirtosudarmo氏に研究報告をしていただき



### 講演会

"Indonesian Migrant Workers in Oil Palm Plantation in Malaysia"  
- Riwanto Tirtosudarmo 「マレーシア、アブラヤシ・プランテーションにおけるインドネシア移民労働者」

"The Costs and Benefits of Oil Palm in Malaysia"  
- Pek Leng 「マレーシアにおけるアブラヤシのコストとベネフィット」

日時：2010年12月11日（土） 15:00～17:30

場所：京都大学稲盛財団記念館3F小会議室

共催：アブラヤシ研究会 基礎研究S「東南アジア熱帯域におけるプランテーション型バイオマス社会の総合的研究

ました。リワント氏は、オーストラリア国立大学で博士号を取得した後、インドネシア科学院で上級研究員をなさっています。専門は政治人口学で、インドネシアと東南アジアにおける人口移動の政治学的研究をなさっています。研究会では、マレーシアのプランテーションにおけるインドネシア労働者の状況について、最新の研究結果を報告していただきました。

### ■マレーシアにおける外国人労働者の概況

2005年の統計資料によると、マレーシアにおける外国人労働者のうち、インドネシア人が最も多く、68%（121万人）を占めています。不法滞在者の数を加えると、200万人に達するといわれています。インドネシア人労働者のうち、業種別にみても最も多いのがプランテーションの労働者で26%、次いで家事労働者が24%、建設業が18%となっています。経済格差などが移民労働者を排出する要因となっています。どの業種においても、共通してみられる労働者側の問題としては、低賃金、雇用者によるパスポートの管理、住居環境の悪さです。建設業と製造業では危険を伴う仕事も多くあります。建設業では離職率が高く、その後プランテーション労働者に流れ込む場合が多くみられます。さらに、ホテルやレストランでのサービス業では、人身売買と結びついているなど、多くの問題があります。

### ■プランテーション産業とインドネシア人労働者

プランテーション産業は、インドネシア人が最も多く就労している産業です。特徴としては低賃金、パスポートが雇用者に管理されている、長時間の重労働、仲介業者による搾取などの問題があげられます。孤立した環境で、最低限の宿泊施設が提供されるのみなので、離職し、建設業に流れ込むことも多いです。インドネシア人労働者の賃金は建設業の場合は、1日25-60リンギットなのに対し、プランテーションでは25-40リンギットとやや低めです。マレーシア政府は外国人労働者の数を年々減らす計画にあり、2008年の210万人から2015年には170万人に減らす計画があります。しかしながら、プランテーション産業における外国人労働者の割合は2008年の16%から2015年の20%増やす計画にあります。

### ■マレーシアにおけるパームオイル産業

現在マレーシアは、世界第2のパームオイル輸出国です。マレーシアで生産されたパームオイルの内、約6割が中国やヨーロッパ、パキスタンなどへ輸出されています。2008年マレーシアは、1,770万トンのパームオイル生産しており、450万ヘクタールの農園においてアブラヤシを栽培しています。これまで、ゴム、カカオ、ココナツが植えられていた土地にアブラヤシが植えられており、栽培面積は徐々に増えています。マレーシアには153の農園があり、67%の農園は半島部にあります。58万人がプランテーションで働いており、そのうち35万人は外国人です。サバ州においては労働者の90%がインドネシア人であるといわれています。

### ■サバ州におけるアブラヤシ・プランテーション

サバ州には、70万ヘクタール農地にアブラヤシが栽培されており、58の搾油工場があります。サンダカン省とタワウ省を中心にプランテーションが広がっています。サバ州は、マレーシア全体においても最も輸出量が多く、全体の25%をサバ州から輸出しています。また、パームオイル輸出からの歳入の30%を、サバ州が占めています。サバ州における外国人労働者は、独立前はジャワ人と華人が多かったのに対し、独立後は、インドネシア人とフィリピン人が多くを占めます。サバにおけるインドネシア人労働者で最も多いのがジャワ人、ついでブギス人、トラジャ人となっています。インドネシア人労働者が多い一方で現地

住民の就労の問題も起っています。現地住民はたとえ貧しくてもプランテーションで働こうとせずに、先住地に住み続けようとしています。なぜなら、月収600リンギットというのは現地住民にとっては低すぎる賃金であり、居住環境も悪く、重労働であるからです。

### ■移住労働者の抱える様々な問題

移住労働者は多くの面で搾取されやすいといえます。パスポートは雇用者に管理され、低い賃金で働かなければならないため、負債の悪循環に陥りやすいといえます。しかしながら、マレーシア政府がこの問題を積極的に解決しようとはしていません。インドネシア領事館も、移住労働者の支援をほとんどしていないため、インドネシア人は頼りにしていません。インドネシア人労働者の避難所となっているのはキリスト教団体のみであるといえます。

(報告：加藤 裕美)



研究会のメンバーに語りかける Riwanto 氏

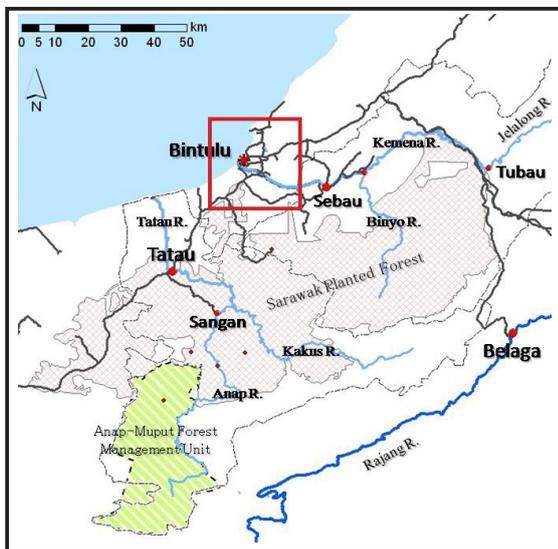
撮影：中根 英紀



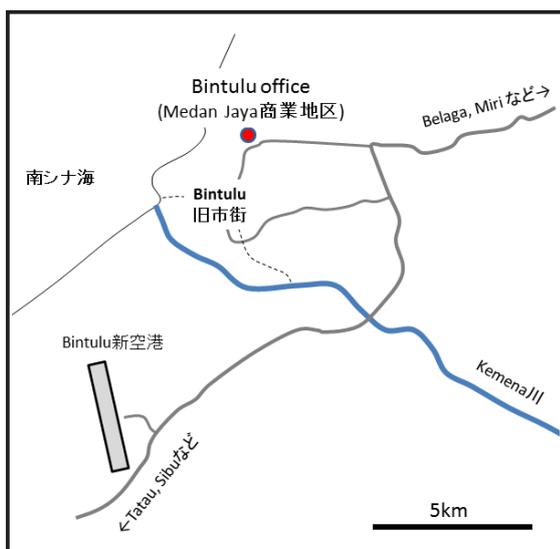
当日はアブラヤシ研究会のメンバーを含めて20名以上が参加した  
撮影：中根 英紀

## Bintulu オフィス開設のお知らせ

本プロジェクトでは昨年末に Bintulu 市の Medan Jaya 商業地区に現地オフィスを開設しました。Bintulu 市は本プロジェクト調査エリアの中央に位置し、1969 年に発見された天然ガスの輸出港として急激に成長した人口 20 万の街です。航路での各地までの所要時間は Kuching (1 時間)、Kota Kinabalu (1 時間 15 分)、Kuala Lumpur (2 時間 10 分) となっており、高速バスでは Miri、Sibu、Kuching などと接続しています。オフィスのロケーションは空港から車で 30 分、長距離バスターミナルの正面にあって、交通至便です。



Bintulu 市と調査エリア



Bintulu office 位置図



Bintulu office 外観。中央の朝陽茶室の2階

オフィス内には冷凍庫・冷蔵庫・乾燥機をそろえ、動植物・水・土壌などの基本的なサンプルの処理作業に対応できるようにしているほか、サンプルのストックルームとしても使用することも可能です。また会議用デスク、ホワイトボードなども揃えて、調査の打ち合わせや小規模な研究会を行うことも可能となっています。Bintulu Development Authority や Bintulu Division Office などの政府機関から集めた資料もここに集積していく予定です。

拠点を持つことによって調査の柔軟性が高まり、腰を据えた調査を行うことが可能になりました。大いに活用し、研究成果を上げたいと思います。また本プロジェクトのメンバーだけでなく、UNIMAS などの連携研究者との共同



#### <主な設備>

- ・ インターネット回線
- ・ プリンター、スキャナー
- ・ ホワイトボード（会議用）
- ・ 流し台（サンプル処理用）
- ・ 冷蔵庫（サンプル保存用）
- ・ 冷凍庫（サンプル保存用）
- ・ 乾燥機（標本作製用）

研究の場としても活用することができればと考えています。

尚、このオフィスの選定やオーナーとの交渉、内部の設備の搬入にあたっては京都大学地球環境学堂の Jason Hon さんに、また会計上の手続きに関しましては本プロジェクトスタッフの田中園子さんにご尽力いただきました。重ねてお礼申し上げます。

（報告：鮫島 弘光）



#### <住所>

**Lot 3672-2-9 Block31,  
Kemena Land District,  
97000 Bintulu, Sarawak**



Bintulu office の内部

写真撮影：鮫島 弘光

## プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	人文地理学	大阪市立大学文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学東南アジア研究所
連携研究者	杉原 薫	グローバル・ヒストリー	京都大学東南アジア研究所
	水野 広祐	農業経済学	京都大学東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学教養学部
	鮫島 弘光	動物生態学	京都大学東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学フィールド科学教育研究センター
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学農学部
	小泉 都	民族植物学	総合地球環境学研究所
	生方 史数	環境経済学	岡山大学環境学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 AIIC
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	産業技術総合研究所
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学次世代研究者育成センター
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学アジア・アフリカ地域研究科
	小林 篤	歴史学	京都大学アジア・アフリカ地域研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	京都大学／Yale University
	Jason Hon	動物生態学	京都大学地球環境学堂
	加藤 裕美	文化人類学	総合地球環境学研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	AbdulRashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	Sarawak Timber Association
事務局	太田 淳	歴史学	Academia Sinica (Taiwan)
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学東南アジア研究所
	田中 園子	総務・会計担当	京都大学東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学東南アジア研究所

京都大学 東南アジア研究所  
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46  
TEL/FAX: 075-753-7338  
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>  
E-mail: [nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp](mailto:nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp)  
編集 中根 英紀 (基盤S事務局)

